

# 家庭や学力の実態調査と家庭への働き掛けで一人ひとりの指導法を練る

## 福岡県 田川市立金川小学校

田川市立金川小学校では、就学前に保護者に調査を行い、入学してくる子どもの幼児期の実態を把握。入学後に学力を見取って相関を分析し、子ども一人ひとりの課題を克服する教育活動を展開している。データに基づいて、保護者に家庭での子どものかかわり方を具体的に伝えるようになった。それらの結果、学力向上など成果は目に見える形で表れている。

### 取り組みのねらい

- 学力や生活態度の差を小さくし、小1プロブレムを解消する
- 保護者が子どもに深くかかわれるように導く

### 取り組みの内容

- 入学予定者全ての保護者を対象に就学前調査を行い、入学してくる子どもの育ちを捉える
- 入学後、学力査定や二者面談を通し、子どもの成長を把握。就学前実態調査の結果と合わせて、一人ひとりへの指導法を練る
- 保護者と連携し、学力向上などにつながる体験を家庭で実践してもらう
- 地域の幼稚園・保育所との連携を強化する

### 子どもの変化・成果

- 学力検査の結果が4～5ポイント向上した
- 子どもが落ち着いて授業に集中するようになった
- 保護者の学校への信頼が高まり、協力体制が整った

#### 取り組みのねらい

保護者の関心は高いが近年は二極化が顕在化

田川市立金川小学校は、かつて炭鉱で栄えた地域を校区に含む。1960年代以降、炭鉱の閉山が相次ぎ、経済的に厳しい家庭は今も少なくない。

現在の教育活動は、90年に行った県の調査が1つのきっかけで始まった。その調査では、生活保護などの経済的支援を受けている家庭の子どもは、受けていない家庭に比べ、学力が低い傾向があることが明らかになった。要因が特に家庭での保護者のかかわりに見られ

#### S c h o o l D a t a

◎1874(明治7)年、寺子屋を仮教場として開校。「生きる力を育む、学校・家庭・地域の協働による教育の総合化」をテーマに、家庭や地域と連携し子どもを育む教育活動を研究する。



校長 中川真一先生

児童数 345人 学級数 15学級(うち特別支援学級3)

所在地 〒825-0005 福岡県田川市大字糺1771

TEL 0947-44-1183

URL <http://kyouiku.joho.tagawa.fukuoka.jp/HPKNGS01/index.html>

公開研究会 未定

# 学びに向かう力を伸ばす新1年生指導

たことから、同校は子育て講座などを積極的に展開し、保護者との連携を柱の1つとしている。ただ、近年、以前とは異なる課題が顕在化していると、熊谷正敏先生は話す。

「当時から保護者は教育に関心がありましたが、子どもにどうかかわればよいのか分らないようでした。子育て講座などを通して次第に積極的に接するようになりましたが、子どもに深くかわかる保護者と、そうではない保護者の二極化が進んでいます」

子どもは全体的に落ち着き、大人の言うことに素直に耳を傾ける。しかし、以前は入学時の生活態度や学力の差が大きく、いわゆる小1プロブレムを抱える子どももいた。21園から新入生を迎えることもある同校では、家庭環境と子どもの成長を丁寧に把握することから始めている。

## 取り組みの内容

### まずきちんと言話を聞けるようになることが重要

入学する子どもの家庭環境を明らかにするために、2002年に始めたのが「就学前実態調査」だ。校区外を含み、幼稚園・保育所の協力を得て、入学予定者の全ての保護者を対象に記名式で行う。「朝起きて顔を洗った、歯を磨いたりしていますか」「絵本の読み聞かせをしましたか」など約50項目ある。この調査と両輪の関係にあるのが、1年生

の4月と12月に実施する「学力査定」だ。教師が日々の学習状況や二者面談を通し、国語、算数、コミュニケーションの3領域について、学力や態度の実態を見取る。今や、就学前実態調査と学力査定の間を分析したデータは、指導に欠かせないものとなった。具体的に説明しよう。

就学前実態調査の「出来事を話す」「話を聞ける」を見ると、「出来事を話す」が出来る子どもは学力査定と有意な関連を示す項目が少なく、関連も弱かったが、「話を聞ける」は学力査定と有意な関連を示す項目が多く、関連が強かった（P.20図2の網掛け部）。

「子どもは『話を聞いてもらうことは心地よい』と体験することで、相手の話を聞くという気持ち芽生えてきます。ですから、保護者には、学力を付けるためにはまずきちんと話を聞けるようになることが重要だと伝えていきます」（熊谷先生）

また、「お絵かき」などでも学力との関連が認められた（P.20図2の網掛け部）。

「お絵かきや紙工作では道具の準備など手順を考える必要がありますから、筋道を立てて考える力の素地になっているのではないかと分析しています」（熊谷先生）

項目ごとの関連には経年変化がほとんど見られないことから、同校では学力や意欲への影響が大きいものを「基本的な生活習慣」「話を最後まで聞く力」「人とのコミュニケーション

図1 子どもを育てる4つの習慣や体験

#### 基本的な生活習慣

- ・朝起きたらあいさつする
- ・顔を洗う
- ・歯をみがく
- ・朝ごはんを食べる
- ・自分のことは自分でできる

#### 話を最後まで聞く力

- ・相手の話を最後まで聞く力が、学習したことが身に付くかどうかということと深く関係しているようです

#### 人とのコミュニケーションを伴った遊び体験

- ・コミュニケーションを伴った遊び体験の中で、数概念や言語が獲得され、幼児期からの確かな学力の土台を形成します

#### 大人の意識的な関わり

- ・絵本の読み聞かせを日課にする
- ・茶碗やお皿を声に出して数えて並べる。といった、大人の意識的な関わりが、子どもの確かな育ちを支えます

\*同校の資料を基に編集部で作成



田川市立金川小学校  
木村恭子 きむら・きょう子

指導方法工夫改善担当。「何歳になっても熱い指導をし、子どもが驚きや喜びの声を上げる授業をつくってほしい」



田川市立金川小学校  
熊谷正敏 くまがえ・まさとし

人権・同和教育担当。「子どもや保護者に誠実に向き合っているかを常に振り返ることを大切にしている」



田川市立金川小学校校長  
中川真一 なかがわ・しんいち

「子どもの笑顔と出合えることが教師の喜び。身の回りの人や物、自分の故郷や国を愛する子どもを育てたい」

ンを伴った遊び体験」「大人の意識的な関わり」の4つに整理した。具体的な対応をまとめ、それを保護者に伝え、家庭での過ごし方の参考にしてもらっている（図1）。

近年は語い力が課題と感じられるため、11

図2 就学前実態調査と学力査定の一覧表（抜粋）

		生活習慣						生活態度						遊び体験													
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26
		朝食	食べ物が好き嫌い	箸	食事のテレビ	ビデオDVD	なる時刻	あいさつ	洗顔・歯磨き	自分で起きる	自立	がまん	約束やきまり	出来事を話す	話を聞ける	しりとり	トランプ双六	ままごと	お絵かき	紙工作	みつつ	口ウソク	アナログ時計	シソー	買いの体験	本を選ぶ	高い高い
50	数の基礎		○																								
51	1対1対応																										
52	順位性																										
53	基数性																										
54	序数詞(本匹枚)							○																			
55	天秤課題																										
56	時計課題												○			○								○			
57	誕生日課題												○	○	○							○					
58	貨幣課題																	△	△	△							
59	集合の大小																										
60	集合の計数																										
61	2つの数の比較																										
62	大きい方から																										
63	集合の加算																										
64	5の補数																										
65	10の補数																										
66	算数合計(15~60)		○																								
67	基礎																										
68	鉛筆のもちかた																										
69	運筆・筆圧		○																								
70	しりとりができる																										
71	あいさつ																										
72	身の回りのモノ																										
73	対義語																										
74	気持ち		○																								
75	語彙の合計		○																								
76	読む																										
77	名前が読める																										
78	名前が書ける																										
79	読む																										
80	書く																										
81	名前が読める																										
82	名前が書ける																										
83	読む																										
84	書く																										
85	名前が読める																										
86	名前が書ける																										
87	読む																										
88	書く																										
89	名前が読める																										
90	名前が書ける																										
91	読む																										
92	書く																										
93	名前が読める																										
94	名前が書ける																										
95	読む																										
96	書く																										
97	名前が読める																										
98	名前が書ける																										
99	読む																										
100	書く																										

表は、縦軸に学力査定の評価項目、横軸に就学前実態調査の評価項目を示し、その関係性を4つの記号で表した。○…5%水準で有意性が認められたもの、◎…1%水準で有意性が認められたもの、△…5%水準で負の相関にあるもの、▽…1%水準で負の相関にあるもの  
\*同校の資料を抜粋して編集部で作成

年度に学力査定 of 国語領域の項目を変更し、身の回りの物の名前や感情を表す表現などの理解度を調査している。その結果、例えば「しゃもじ」の存在は知っているが、名前を答えられない子どもが多いことが分かった。「家庭で使っているのに答えられないのは、

意識して名前を口にしなからだと考えられます。保護者には『しゃもじを取って』と言うなど、日常生活で使う物の名前を意識してもらいように伝えていきます(熊谷先生) 学力査定は12月に再度実施し、4月からの成長を把握。それを基に課題を洗い出して指

導を見直し、保護者面談でデータを見せながら「○○は頑張りましたが、△△が課題です」などと伝え、家庭での協力を求めている。

**家庭で出来る体験を伝え 保護者と共に子どもを育てる**

6月には「わくわくドッキリDAY」を開催し、子どもの成長に相関のある体験が何であるかを1年生の保護者に伝える。体育館に「トランプ遊び」「しりとり」「箸での豆つまみ」などのコーナーを設け、保護者と子どもが一緒にウオーケラリー形式で体験するイベントだ。木村恭子先生は次のように説明する。

「平日に行うイベントですが、9割以上の保護者が参加します。共働きなどで普段は子どもとあまりかかわれないと感じている保護者も、『少しの時間で家庭でも出来る体験がたくさんある』と気付いていただいています」

他にも、「指導方法工夫改善だより」を単元ごとに発行し、今取り組んでいる単元の内容、家庭で出来る体験を伝える。1年生担任は、連絡帳ではなく直接話した方が良く思うことは、電話を掛けたり家庭訪問を行ったりして保護者とのつながりを深めている。

「1年生は学校教育の入り口段階です。この時期に学校に親しみを感じてもらえると、その後も学校に良い印象を抱き、協力も得られやすくなります」(木村先生)

幼稚園・保育所との交流も重視する。就学

# 学びに向かう力を伸ばす新1年生指導

前実態調査と学力査定の分析には、幼保の担当者も参加。互いの授業・保育も参観し、子どもの育ちについて話し合う。こうした連携により、園では小学校との接続を意識した教育が行われるようになった。例えば、園では「キリンとゾウはちがう」といった質の違いは教えるが、数は「ちがう」と教えていなかった。しかし、小学校では数も「ちがう」として教える。そのことに気付いた保育者の提案で、今では園でも数の違いを教えるようになった。

1年生の算数では習熟度別授業も行っている。1つの課題にじっくり取り組むチームと、学び合いを取り入れて発展的な問題に挑戦するチームの2つにクラスを分けている。

「1年生で習熟度別授業は難しいのではという意見もあります。しかし、1年生は長時間集中できず、全ての子どもが理解するまで待つと、待っている子どもの集中力が途切れてしまいます。そのため、習熟度別に分けていますが、チームは必ず子どもと相談して決め、固定もしていません。子どもが途中で『こっちは自分に合わない』と感じたら、相談してチームを移ります」（木村先生）

## 子どもの変化・成果

### 学力検査の結果が向上 授業姿勢にも変化が見られる

子どもの変化は明確なデータとして表れて

いる。2年生のNRT（全国標準学力検査）の偏差値と学力期待値（知能検査から算出）を見ると、近年は両方とも、取り組みが始まった02年度と比べて4〜5ポイント程度高い50前後を維持している。

「学校や家庭での働き掛けにより知的好奇心が高まって学力期待値が上昇すると共に、学力も伸びていると考えます」（熊谷先生）  
子どもの授業への姿勢も変化している。

「1年生らしくにぎやかな時もありますが、ここはというポイントでは気持ちを切り替え、教師の方を向いて集中できるようにになりました。相手の話を聞く力や姿勢が高まっているからだと思えます。友だちの発表を聞いて『こう話せば分かりやすい』と気付くなど、互いに表現力を高め合っている姿も見られます」（木村先生）

今後の課題について、校長の中川真一先生は次のように捉えている。

「保幼小連携は大きく進展しています。より長い期間で子どもを見取るため、今後はもう1つの段差である小中連携に取り組みたいです。また、担当者が異動になっても取り組みを継続させるため、学校としていかに継承するかを考えていきます」

保護者の二極化への対応も、重要な課題だ。地域の施設との連携も強化して家庭を支え、子どもを学びに向かわせる教育活動を充実させていく考えだ。

## 学校をつくり、動かすチームワーク

### 校長・副校長の役割

先生方の提案は前向きに受け止め、出来るだけ背中を押すようにしています。結果が良くても悪くても、次の方策を考える貴重な資料になるからです。学校として前進していくためには、そのようなチャレンジが不可欠だと考えています。

外部との連携の素地をつくることも校長の大切な役割です。校区にある3園の運動会や卒園式には全て出席し、地域の施設には頻りに顔を出すようにしています。

校長 中川真一先生

### ミドルリーダーの役割

まずは私が園を訪問し、先生同士が名前と顔の分かる関係をつくるのが、連携の出発点になると考えています。連携を通して、園の先生方や保護者などとのさまざまなつながりを持つことの喜びは、私自身、取り組みの原動力となっています。活動は1年生の担任が中心となって行いますが、実態調査などのデータから成果や課題を導き出して提示し、日々の教育活動を方向付けることも、私の役割だと思っています。

人権・同和教育担当 熊谷正敏先生